

研究ノート

『リーन्हルトとゲルトルート』に見る社会的貧困

—ペスタロッチー教育思想の前提—

Der Pauperismus in Pestalozzis Volksroman : Lienhard und Gertrud

— Die Vordersätze des Erziehungsdenken Pestalozzis —

光田 尚美

要約：ペスタロッチーの思索と活動は「教育の知見」として継承されているが、そこには狭義の「教育」概念にとどまらない、人間生成へのトータルなアプローチがある。本稿はその点に着目し、ペスタロッチー評価に新たな視座を提供しようという試みの一端である。

本稿では、『リーन्हルトとゲルトルート』の描写から当時の民衆の課題を明らかにするとともに、その克服に際し、「新しい人間をつくる」という観点が提起されていたことを指摘した。この着眼が、貧民救済にこだわったペスタロッチーを、「施与としての救済」ではなく教育事業に導いたとともに、そこに彼の独特のアプローチがあると考えられる。

Key Words：18世紀スイス、社会的貧困、『リーन्हルトとゲルトルート』、ペスタロッチー

I. はじめに

本稿の目的は、ペスタロッチー (Pestalozzi, Johann Heinrich, 1746-1827) の思索や活動の前提となる18世紀スイスを生きた民衆(とりわけ下層民)の課題に着目し、その克服に際して、彼がなぜ「施与としての救済」ではなく教育事業を構想、展開したのかという、いわば彼の教育思想の前提を明らかにすることである。教育学研究において、彼の思索と活動は「教育の知見」として継承されているが、そこには狭義の「教育」概念にはとどまることのない、人間生成へのトータルなアプローチが見られる。本稿は、その点に着目し、ペスタロッチー評価に新たな視座を提供しようという試みの一端である。

ところで近代ヨーロッパ社会は、政治、経済、産業、芸術などさまざまな分野で近代化を推し進める一方で、深刻な「社会的貧困 (Pauperismus)」に直面していた。本稿ではこの「社会的貧困」を取り上げ、ペスタロッチーがその本質をどう捉え、克服の方途を何に見出そうとしていたのかを考察したい。

ヨーロッパ社会において、「貧困 (Armut)」による災いは決して新しいものではなく、むしろこれまでの長き

にわたって問題であり続けてきた。しかし「社会的貧困」がかつての世紀の「貧困」と区別されるのは、困窮のために下層に押しやられた、異常な数の「貧民 (Armen)」が見出されたためである (vgl. Zehnder, 1848, S.5)。

カントン・チューリッヒのいくつかの地域においても、「社会的貧困」は確かに進行していた。地域によっては、住民の大部分が経済的な生活を破綻、あるいは破滅に近い状況に追いやられたところもあったという。それは特に、農業から他の産業への移行が進んだ地域であった (vgl. Zehnder, a. a. O. S.12f.)。

ペスタロッチーは、18世紀スイスのこうした下層民の生活実態を、民衆小説 (Volksroman) という形で記録している。『リーन्हルトとゲルトルート』 (Lienhard und Gertrud, 1781-87) と題されたそれは、彼の初期代表作である『隠者の夕暮』 (Die Abendstunde eines Einsiedlers, 1780) に続いて出版され、箴言的な『隠者の夕暮』の内容を写實的に表現したものと評価されている。また、「民衆の書 (Ein Buch für das Volk)」との表題からもわかるように、民衆を啓蒙し、困窮に打ち克つ力を得させたいとするペスタロッチーの思いも込められていた。しかしそれ以上に、当時の農村で生きる人々のリアルな描写と、彼らに向けられたペスタロッチーのまなざし、さらにはその根底にある人間観を読み取るこ

とができるのである。

なるほど小説はフィクションである。しかしそこに描き出されている民衆の生活実態や彼らの意識、考え方は、ペスタロッチャーにとって、ノイホーフでの経験が直接に教えてくれたものであった。加えて少年期の、祖父アンドレアスのもとでの生活もまた、それらの理解を深めるのに資したと思われる。ペスタロッチャーの祖父は、チューリッヒからほど近い郊外、リマト河畔のヘンクという農村の牧師であった。そこで休暇を過ごした少年ペスタロッチャーは、自然と祖父に従い、貧しい人々や病人のもとを訪れ、彼らの生活の困苦を目の当たりにした。

ペスタロッチャー自身の暮らしもまた、決して裕福ではなかった。父親の夭逝により、生家の家計は苦しかった。成人後も、夫人の実家に借金をして始めたノイホーフの事業が失敗し、資産も信用も失われた。こうした幾度の苦難のなかで、彼自身もまた「貧困」が何であるのか、身をもって知っていたといえよう。

『リーンハルトとゲルトルート』は、こうした背景のもとに著された。その意味において、ペスタロッチャーの思想の一端を知るのみならず、当時の社会を知るための優れた史料であるといえる。そこで以下、『リーンハルトとゲルトルート』を手がかりに、18世紀スイスの民衆生活、特に「社会的貧困」がどのような様相を呈していたのかを明らかにしたい。

II. 『リーンハルトとゲルトルート』に見る社会的貧困

まず、『リーンハルトとゲルトルート』の筋書きを概説しておきたい。小説の舞台は、ボンナルという小さな農村である。物語は石工リーンハルト（善良だが酒好きで、居酒屋を営む代官フンメルに誘惑に抗えない）と、その賢い妻ゲルトルートを中心に展開する。本筋は、ゲルトルートが領主アーナーに村の窮状を訴えたことを契機に、この若い領主が牧師やゲルトルートの支援を得ながら腐敗を摘発、村民の生活の抜本的な改革を進めるといふものである。

小説は四部構成であり、1781年に第一部が出され、その後隔年で第二部から第四部が著された。第一部では、ボンナル村の墮落の状態や代官フンメルが村にもたらす不幸が描写され、第二部では悪人たちの処罰と、彼らが墮落した原因が明らかにされている。そして第三・四部にて、村落共同体の実質的な改革が描かれている。

こうした筋書きにも見るべき点が多いが、先述したように、小説の魅力は民衆生活の描写のリアルさにある(cf.

K. ジルバー, 1981, p.52. 村井, 1986, p.87.)。そこで以下、その生き生きとした描写から、当時の地方農村の実態を読み取っていきたい。

1. 「貧困」の描写①—リーンハルト—

物語は、「善良な男、しかし彼は妻と子をたいそう不幸にする」と題された章から始まり、リーンハルトの設定が示される。

ボンナル村に一人の石工が住んでいる。彼はリーンハルトといい、その妻はゲルトルートである。彼には7人の子どもがおり、稼ぎもよいが、よく居酒屋に誘われるという悪い癖がある。(中略)この村には横着で狡猾な者たちがおり、(中略)リーンハルトが飲んでしていると、彼を賭博に誘い、彼が汗を流して稼いだものを奪い取ってしまうのだ。(中略)翌朝、リーンハルトはそれを悔いた。ゲルトルートと子どもたちがパンにこと欠いているのを見ると、彼は心を痛め、(中略)涙をかくすのだった。(Lienhard und Gertrud, 1844, S.1.)

リーンハルトは、裕福とはいえないまでも仕事をもち、「稼ぎがよい(Er hat einen guten Verdienst)」。しかし、その稼ぎを酒代や賭博にすべて費やし、妻や子どもたちを経済的に苦しめるという設定である。ここに、善良ではあっても思慮に欠け、欺かれやすいという人間本性の脆弱さが示され、「貧困」問題との深いかわりが見られる。

2. 「貧困」の描写②—ヒューベルルディー—

ヒューベルルディーは、リーンハルトの隣家の主である。4人の子どもと自身の母親と暮らしており、3日前に妻を亡くしたばかりである。第一部の第16章「帽子を取りない、子どもたちよ、やがて臨終の時だ」では、臨終を迎えた母親を中心に、一家の窮状が描かれる。

挿画には、藁を敷きつめたベッドの上に横たわり、ほろきれのような布団をかけた老女の姿が描かれている。臨終の床にありながら、彼女は孫ルデリの所業を知り、最後の力を振り絞って問い詰める。

祖母：私は昨日見たのだけれど、ルデリが私のベッドの後ろで、焼いたジャガイモをポケットから取り出していたのだよ。(中略)ルーディ、このジャガイモは私たちのものではないでしょう。(中略：ヒューベルルディー

がルデリを呼ぶ)

祖母：お前はあれを盗んだのかい。

ルデリ：(すすり泣いて) う、う、うん、おばあちゃん。

祖母：誰の家からそれを盗んだのかい。

ルデリ：い、い、石屋さんの家から。(Lienhard und Gertrud, 1844. S.33.)

ひもじさに耐えきれなかったルデリは、リーンハルトらにとっても貴重な糧であるはずのジャガイモを盗んだ。その罪がいかに残酷で哀れなものであるか。愛する祖母の臨終という設定は、その印象を際立たせている。



Lienhard und Gertrud, Erste Fassung Teil 1.

ルーディの母の臨終

さらに、第37章「彼らは貧しい男に豌豆のスープを持っていく」では、リーンハルト夫妻が一家を訪ねたときの様子が次のように描かれている。

彼らがやって来たとき、ベッドの上の死人の傍らでルーディは、泣いたり、ため息をついたりしていた。幼子はその父親に、その部屋から呼びかけて、パンをせがんだ。—いや、パンはない。生の大根すらないのに、何かあるだろうか。(中略)すると幼子は：ああ、お腹がすいたよ、お父さん！ぼく眠れないよ。ああ、お腹がすいたよ、お父さん！(Lienhard und Gertrud, 1844, S.65)

子どもたちがパンを求めて泣いていても、家族はただ絶望し、隣人の慈悲にすがるしかない。こうした一家の姿こそ、程度の差はあれ、「貧困」にあえぐ当時の地方農村の実態であった。

1836年、貧民救済に関する法律が制定されて以降に記録された資料によれば、カントン・チューリッヒにおける貧民への支援総額は、約10年の間に70%以上も増

加したという(vgl. Zehnder, a. a. O., S.12.)。それはすなわち、いくら援助があっても、それ自体が彼らを「貧困」から救い出すのではないということである。次のロイティーマルクスの描写は、こうした問題を如実に示している。

3. 「貧困」の描写③—ロイティーマルクス—

以前には裕福であり、何不自由のない暮らしをしていたものが、商売の失敗や工業の停滞などによって窮乏することもある。彼らはしばしば、「貧困」に苦しみながらも「高慢(Hochmuth)」であり続けた。ロイティーマルクスはそうした人物の一人として描かれている。

第26章「貧困と悲惨のなかでの高慢は、不自然で厭うべき行為をさせる」では、次のように述べられている。

マルクスは以前には豊かであり、商売をしていた。しかし今は、彼が所有していたものはずっと以前に強制競売に付され、ほとんどまったく、牧師や二、三の裕福な親戚の施しによって暮らしていた。しかし悲惨な状態にありながら、彼は常に高慢であり、(物乞いをするところの他では)彼の家庭のひっ迫した欠乏や飢餓を、できるだけ、叶う限り隠していた。

彼は代官を見ると、(中略)急いで散らばったぼろ服を集め、それらをベッドのかけ布団の下に隠し、ほとんど裸の子どもたちに物置部屋に隠れるよう命じた。—おお、大変だ！子どもたちは言う。雪と雨とが吹き込んでくよ。(中略)あの部屋には窓が一つもないのだから。(Lienhard und Gertrud, 1844. S.46f.)

突然の代官の訪問に、マルクスは子どもたちを窓のない物置に閉じ込めるのだが、彼らは半裸で飢えており、加えて吹き込む風や雨、雪に凍えて紫色になっている。このような状態でなお「落ちぶれた」とは見られたくないマルクスは、代官の持ち込む日雇いの仕事を拒否する。

リーンハルトやヒューベルディは思慮に欠け、家族の危機に絶望するしかなかった。マルクスは高慢によって、自らを無力化してしまっていた。無思慮や高慢は、「貧困」という危機的状況が浮かび上がらせた、人間本性の脆弱さでもある。ペスタロッターはここに、「貧困」という時代の課題を、「人間とは何か」、「いかにあるべきか」との問題へと収斂している。

4. 「貧困」の描写④—子どもたち—

第一部の第32章「祈りのときの喜び」では、「貧困」のなかの子どもたちの様子が描かれている。

母親（ゲルトルート）：ニクラス、最も飢えに苦しまなければならない人は誰か、お前は知っているかい？

ニクラス：お母さん、それはルデリ（ヒューベルルディの息子）だよ。お母さんは昨日、ルデリのお父さんのところに行ったでしょう。あの人はすぐにも飢えて死んでしまうかもしれませんよ。彼は地面から草をとって食べているのです。（中略）

母親：それではリーゼ、お前は時々、お前の夕食のパンを誰にやろうと思うの？（中略）

リーゼ：ロイティマルクスさんの家のベテリよ。私は今日、ベテリが代官さんの家の堆肥のところから、腐ったジャガイモを掘り出しているのを見たわ。（Lienhard und Gertrud, 1844. S.58.）

親たちの「貧困」はそのまま、子どもたちの苦しみである。草を食み、堆肥のなかの腐ったジャガイモで命をつながなければならない彼らは、親たちもそうであるように、「物乞い（Bettler）」をし、時には盗み、生活に絶望するしかなかった。

第三部では、領主アーナーが代官フンメル会計簿に記載されている者、つまり代官に何らかの借金をした者たちを呼び寄せる場面がある。驚くことに、そこには年端もゆかぬ子どもたちの名前もあった。ふとした出来心から代官に借金をし、母親の小銭を盗んで返済した少年や、家族の不幸に嘆く父親を慰めるために酒代を借りた少女の挿話が示される。

しかし領主は、真っ先にこうした子どもたちを許す。「もう二度としてはならない」と言い含めるにとどめ、時には父親のように握手を求めるのである。子どもたちは最大の犠牲者であり、誰よりもまず救われなければならない。ゆえに領主は、ボンナル村の「学校」の設立を決意する。ここに人間教育が、一つの大きな課題となって立ち現れたのであるが、こうした領主アーナーの心情は、まさにペスタロッチーの思考を明瞭に代弁したものである。

Ⅲ. 結びにかえて—ペスタロッチー教育思想の前提—

1. 人間本性の脆弱さと向き合うこと

(1) 「貧困」に打ちひしがれる人間を見つめて

『リーンハルトとゲルトルート』に描き出されたヒュ

ーベルルディやマルクスの姿は、当時の地方農村に生きた「貧民」の姿の典型であったといえよう。私たちはそこに、豊かな国と報告されていた近代スイスの影の部分を見るとともに、下層民の生活の厳しさをうかがい知るだろう。

ところで、彼らはともに根っからの「貧民」というわけではなかった。かつてマルクスは裕福な商売人であったが、事業で財を失ったことから、牧師の喜捨や物乞いにすがるようになった。また、ヒューベルルディは、先祖代々の牧場を代官の不正な手口により没収され、貧しい生活を余儀なくされたという設定である。

物語では、このヒューベルルディに幸運が訪れる。領主の尽力で、牧場が返還されたのである。ところが、新たな問題が生起する。

ゲルトルートが訪ねたのは、いまだすべての子どもたちがベッドに居て、ルーディがやっと起きだしたときであった。子どもたちの衣類は床に散らばり、猫がテーブルの上の黒い包み紙のそばに座っていた。その包みから、彼らは昨日、食べたのであった。（中略）彼はもうすっかりと、無秩序に慣れてしまっていた。（Lienhard und Gertrud, 1844, S.145.）

ヒューベルルディー一家の生活はすっかり怠惰なものとなっていた。ペスタロッチーはここで、ゲルトルートに、「貧困とそれに打ちひしがれたことが、人間にとって、あらゆる家政の精神（Haushaltungsgeist）を墮落させる」と言わしめている。彼によれば、「貧民」の問題を克服するためには、「貧困」によって打ちひしがれた人間的な部分を、一彼はそれを家政（Haushaltung）という生活力に見とめているが—再び活気づけることが必要なのである。

つまり、ペスタロッチーの思索と活動は、人々が自らの本性の脆弱さと向き合い、いかにそれを克服するのか、という問いから開始されなければならないのだ。後の著作に示される「内的醇化（innere Veredelung）」という概念は、こうした時代の課題に照らしてこそよりよく理解されうるのである。

(2) 動き出す時代の課題を捉えて

『リーンハルトとゲルトルート』には、時代を象徴する社会の動きも捉えられている。第二部の第70章で展開される、牧師の説教の一部である。

この時代に新しく興った綿糸紡績業は、一時に流行し、多くの人々がそれに貢献した。

私たちの地方全体の裕福な人々は、以前にはお金など持っていなかった。その豊かさは、食物や飲み物、衣類に（中略）よるものであった。

これに対して、新しい紡績業に従事する人々は、たちまち財布に多くのお金を持つようになった。そしてこれらの人々は、かつては財産も資力もなかったので、家のことや貯蓄について何も知らず、儲けを食の道楽に使果たした（中略）。

土地を持っていた人々は、そんなことはできなかつたし、紡績で稼ぐ時間もなかつた。しかし、ちょっと前まで一握りのカブやイモにもうれしい言葉をくれていた紡績業のルンペンに比べて、劣りたくなかつたのだ。（中略）コーヒーや砂糖を必要とし、（中略）もはや、自分の土地で育ったものだけでは満足しなくなつた。（Lienhard und Gertrud, 1844, S.231.）

紡績業が、賃金収入に慣れていない人々の生活を破綻させていることが指摘されている。1830～40年代のチューリッヒの「社会的貧困」も、実際には、住民の大部分が工業分野に従事している地域に顕著であった（cf. Zehnder, a. a. O. S.13.）。しかしそれは、紡績業に従事する人々だけの問題ではなかつた。たとえばリーンハルトがそうであるように、それは以前と変わらぬ生活を続ける人々をも巻き込む、社会的問題となつたのである。

2. 時代の課題に応えること＝教育

しかしながら、紡績業を排除することがただちに事態を改善するわけではない。むしろ、この新しい時代の動きのなかでいかに「人間」を取り戻すか。小説の第三部、第四部では、こうした課題が追究される。

たとえばゲルトルートは、子どもたちに糸紡ぎを教える。貯蓄をし、家計の知識を教える。彼女は伝統的な家庭や共同体に根づくキリスト教精神を重んじつつ、時代の波に抗うのではなく、その波にのまれることなく生きることを教えるのである。時代を主体的に生きる「新しい人間」。ペスタロッチーは物語を通して、この「新しい人間」を生み出す必要性を唱えたのだといえる。

この「生み出す」働きを、ペスタロッチーは「教育」に期待したのではないか。そして、「貧困」に苦しむ人々を救いたいとする情熱はもとより、「貧民」の直面している時代の課題こそが「新しい人間」を生み出す契機と

なるという確信が、彼を貧児・孤児教育の実践へと駆り立てたのではなからうか。

貧しい人々、貧児や孤児たちを救うのは、彼らのうちから「新しい人間」を生み出すこと。それは、『リーンハルトとゲルトルート』にも示されたように、家庭や学校によるところが大きい。しかし子どもたちの生活には、政や立法、宗教、経済活動・仕事（職業）もまた絡み合っている。これらの営為と教育との連関を明らかにすること、あるいは、これらの営為を教育へと統合することによって、ペスタロッチーは先の課題に応えようとしたのではないか。

ペスタロッチーの描いた「貧困」を理解することで、私たちは「教育」という理念のもつ大きな意味を感受することができるだろう。今後は、その理念のもとに構想された方法の効果についてさらに追求し、ペスタロッチー教育思想の再評価につなげていかねばならない。

参考文献

- ・村井実『ペスタロッチーとその時代』玉川大学出版部、1986年。
- ・光田尚美「ペスタロッチーの貧児・孤児救済の意義—18世紀スイスの子ども福祉の状況から—」『関西福祉大学社会福祉学部研究紀要』第14巻第2号、2011年、pp.47～56。
- ・J. H. ペスタロッチー、長田新監訳『ペスタロッチー全集』第二巻・第三巻、平凡社、1959年。
- ・K. ジルバー、前原寿訳『ペスタロッチー』岩波書店、1981年。
- ・J. H. Pestalozzi : Lienhard und Gertrud. Ein Buch für das Volk. Zürich, 1844.
- ・J. H. Pestalozzi : Sämtliche Werke — Kritische Ausgabe : Band 2 — Lienhard und Gertrud (Erste Fassung) 1. Teil 1781 und 2. Teil 1783 / bearbeitet von G. Stecher — hrsg. von A. Buchenau, E. Spranger und H. Stettbacher, Zürich, 1995.
- ・U. Zehnder : Die Noth der Verarmung oder der Pauperismus und die Mittel dagegen mit besonderer Rücksicht auf den Kanton Zürich. Zürich, 1848.

付記）本稿は、平成23年度日本学術振興会科学研究費補助金〔若手研究（B）・課題番号20730517〕の交付を受けたものの一部である。

